

2010年6月23日 水) 14時、勉強会まとめ

哲学「ア」 3年 想田 瑞恵

「正しき」とは何か、対話と承認

「対等」・「尊重」・「承認」

対話的關係においてのみならず、気持ちを配慮しあう関係においても、いわゆる「土から目線」は嫌悪され、あらゆる格差などないかのように振舞う。また、相手が自分と違うことを考えていても、それを認めるし、尊重する。これらの「対等」・「尊重」・「承認」は、対話的關係と同じ意味であろうか。

そもそも、気持ちを配慮しあう関係において、なぜ気持ちとは配慮されるべきものなのか。それは、気持ちというものが自分の根幹だからである。自分が他と違う特別な存在だと思うとき、自分の中にその根拠を求めると、感受性(気持ち)しかないことに気がつく。そこでそれを、自分が特別である根拠、すなわち個性とする。しかし「特別」とは価値判断を含む言葉であり、感受性だけでは価値があるとはいえない。そこで、そのままの君がすばらしい個性(ダイヤの原石)の持ち主だ」という意味で、あるがままでいい」とか存在しているだけですばらしい」と言い合うことが、暗黙の了解となるのだ。つまりこの言葉は、特別な賞賛される個性がないからといってあせる必要はないのだ」という、個性を求める人々を避難させる働きを持っていると言えるだろう。個性を求める人々とは、自らの気持ちに絶対の価値を置くという意味で、自分の気持ち至上主義者」である。このように、自分の根幹・特別な価値をつけた気持ちなので、配慮が必要になってくる。気持ちが傷つかないことが大前提であるため、「対等」も「尊重」も「承認」もそれに応じたものとなり、対話におけるものとは意味が違ってくる。

気持ちの配慮のための「対等」の意味は、みんながオンリーワン・特別だ」というものだ。これは、先に個性を発揮した人(社会的に賞賛されている人)への「投げ駆け禁止」という命令にもなる。つまり、自分のみが価値ある存在と思いたい、オンリーワンよりナンバーワンでありたい(責任を伴わない限り)」と思っているのだが、平凡な特別でない)状態、すなわち格下であることが恐ろしく、「対等」を装うのだ。そして、そうした大切な気持ちに介入しないことが「尊重」である。私はあなたではないのだから、あなたが何を考えているかはわからない。だから私と違うことを考えているとは認め、その邪魔はしません、否定はしません」と言うのである。そもそも、自分の気持ちを否定されることがありえないと思っている。相手の価値観という物差しで私を計ることなどできないのだから。ゆえに私の感受性の絶対性が絶対的であると認めることが、「承認」であり、自分の感受性(物差し)を押し付けないことが「尊重」なのである。

自分の気持ち至上主義者」の人間関係

特別な個性を認め、それに配慮すること、すなわち「誰もが特別だ＝対等だ」と考え、気持ちを傷つけないこと。これこそが「自分の気持ち至上主義者」にとつての正しきであ

る。自分の気持ちこそが真実であり、この世界を支配する唯一にして絶対の法なのだ。ゆえに、常に、法である気持ちが害されない人間関係を期待する。この人間関係は、一種の取引である。つまり、相手の気持ちも、相手の世界を支配する法としてなら存在してもかまわないが、その法を私の世界に押し付けないこと、私の法を特別な個性として承認してくれることを要求しているのだ。この契約を理解せず合意を目指そうとする姿勢は、単なる越権行為であり、私の気持ちを傷つけるという罪、許しがたい悪である。そのため、自分の気持ちといえど、それを傷つけることは、公的に罰するに足るふるまいとなる。あるいは、そういうことをする相手はもはや人間ではないため、関係を絶つてしまつてもよい。関係を良くするためだけに刹那的な発言をすることもあるが、責任を問う方が、つまり言葉に一貫性を求めるほうがおかしいという姿勢でもある。自分に都合のいい人・感受性があう人しか見ようとしないのだ。

自分の気持ちこそが正しきである？

過去を美化せず、また誇らしげなトラウマ披露にならないように語るのは難しい。しかし、自分の気持ちが正義であるとはどういうことで、気持ちを傷つけることが悪であるとは、具体的に何を意味するのか確認するために、できるだけ気をつけて語つてみたい。

私が中学生のとき、新任の音楽教師が学校からいなくなった。彼女は私の学年に音楽を教え、私のクラスではないが、同じ学年の担任を受け持っていた。彼女が担当したクラスは、全体的にひどく荒れており、授業が成立しないのがあたりまえの状態がしばらく続いていた。そのうち保護者から苦情がでたこともあり、彼女はのとき目に付いた人を名指しで注意したらしい。このことが、教育委員会をも巻き込む大問題にまで発展した。注意された生徒の母親が「うちの子をこんなに傷つけて！辞めさせてください！」と訴えたそう。学校の圧力も大きく、彼女は「登校拒否」をし、後に退職した。自分の気持ちが傷つくことは、公的にも当然悪だとする例だろう。ゆえに人の気持ちを傷つけることは、教師失格だけでなく、人間失格なのだ。

また中学生のときの話である。同じクラスにもいくつかのグループがあり、グループ間の交流はまず見られない。そのひとつの男子グループの話である。そこでは、ある小柄な男子がいつもいじられていた。プロレス技をかけられたり、たたかれたりしていたのだ。どれもかなり痛そうだったが、彼は本気で痛がると、次の瞬間本気で痛がつたことに対して「わりい」と謝っていた。おそらく、本気で痛がることで関係を滞らせたこと、予定調和の関係を乱したことへの謝罪であろう。関係を乱すことは、体の痛みよりも「悪い」とだという認識がそこにはある気がする。そうした関係の中で、彼はあばら骨を折られたらしい。その時も彼は謝ったのかはわからない。しかし彼の両親は謝っていた。「いたらない息子で」という言葉だったと思う。加害者に対する恨み言は一切なかった。彼はなににいたらなかったというのか。

私の母と仲がよかった方の息子さんの話である。私と同じ学校に通い、同じ学年だったが、クラスは違った。彼は、部活動中に他の部員たちから石を投げつけられたそう。顧

問教師もいたのだが、その様子を黙認していた。石を投げつけられた彼は、両親がそろっているが、投げつけた部員たちはそうではなかった。だから、彼らのほうがかわいそうであり、彼は石を投げつけられても仕方がないと、その顧問は話していたらしい。その顧問にとっては、そのとき感じた「かわいそう」という気持ちが、何より重視されるべきものだっただろう。

これらの出来事において、私は当事者ではなく、決定的場面にも居合わせなかった。だから私には関係のないことであり、私は悪くなかった。むしろ関係のないことに首を突っ込むほうが悪いことである。そう言うこともできるだろう。しかし本当にそうだろうか。辞めさせろ」という訴えも、人に故意に怪我をさせることも、石を投げつけることも、傍観者面した吐き気を催すようなするさも、すべて正しいのだろうか。

自分の気持ち至上主義者」と対話をする人の違い

自分の気持ち至上主義者」についての正しさ・真理は、自分の気持ちという内にあるもののことであつた。しかし対話における真理・正しさとは、自分の外にある普遍性、すなわち「すべての人間がそうすべきこと」のことである。つまり、対話をする人とは、普遍的な真理に興味がある人のことだ。ゆえに、対話の原理である対等は、真理追及という目的の前では、**そもそも感受性に優劣などない」「誰も特別でない」というものであり、自分で作っていくものということになる。**また尊重は、**他人の考えにも価値がある・意味がある」とみなすことだ。**自分が規範たる真理に近づくため、相手の意見は大切なものとなる。対して、規範が自らの感受性である**「自分の気持ち至上主義者」**は、相手の感受性は自分と同じ重さではない。彼らにとって重視すべきものは唯一**「自分の気持ち」**なのだ。

「自分の気持ち至上主義者」が、私の気持ちは特別だと私以外の人にも思つてほしいと、個性や承認を得ようとして、対話にシフトしようとする。しかし自分の気持ちこそが真理・正しさだと思つている点で、対話の一番のポイントを実行できていない。対話が追究する真理よりも、自分の気持ちを真理として承認してほしいのだから、場の沈黙は自分の無視に、否定は承認されなかったという落胆に、肯定は「次も同じくらいのことが言えなければ承認されないだろう」という不安あるいはプレッシャーにつながってしまう。また、彼らは、真理を追究しようとしていないから、相手の感受性に自分のものと同じ価値を認めていない。ゆえに結局、**「自分の感受性以外はどうでもいい」という考え**であり、対等でも尊重でも承認でもない。彼らが「対等」の確保を訴えるのは、自分の感受性が絶対的である場を求めているからに過ぎない。さらに、彼らは求めるべき真理を信じていないから、自分の気持ちが否定されることを損としか思えないし、自分の気持ちの形を変えようとする合意も求めようとしない。あくまで自分が中心であり、他人は自分が承認なり個性なりを得るための道具だと思つているのだ。

「自分の気持ち至上主義者」の道徳

人に石をぶつけることすら、時として正しさであると認めなければならないことは、絶対におかしいとは思ふ。しかし、求めるべき真理」というものを信じられるのは、その人

の経験によるところが大きい気がしてしまい、「自分の気持ち至上主義者」である私には、どうもそれが信じられないのだ。

もし、「石を人に投げつけること」は正しさではないと思う気持ちが、あなたの育った家庭では、両親がそろっており、そこそこ裕福だったから、その幸せ（既得権益）を守ろうとしてのものだ」と言われて、違うといえるだろうか。私には、それは「正しい」意見に思えてしまう。おそらく私にとって、石を投げつけられた人の痛みより、自分の幸せを後ろめたく思う気持ちのほうが強いからだ。

このように、どこまでも「自分が何を感じたか」を重視する私は、きっと「大に石を投げつけるべきではない」とは思えないだろう。もし思うなら、私は人に石を投げつけたくない」だろう。嫌な言い方になるが、血を流す人を見るのは不快であるからだ。もし、そのときむしやくしやした気持ちだったなら、石を投げつけるかもしれない、そこに理性が挟まる余地はない。ゆえに私が説得されるのは、正しさ・真理ではなく、共感であるので、人の痛みが我がことのように感じられて、傍観者は単独だと思えるような感受性を育てたほうがよいのかもしれない。

自分の気持ち至上主義者」に必要なこと

自分の気持ち至上主義者」の弱点は、他者の排除と低価値化に伴う自己肯定感の薄さだった。個性の実現よりお金のために働く」と考えても、金銭と引き換えに他者を我慢しているだけであつて、何も改善されていない。結局、追及すべき真理を認めないのに、対話の意味で他者を尊重することなどできはしないのだ。

ただし、対話においても、究極的に尊重しているのはただ真理のみであり、私も相手も尊重していない」と言うこともできるだろう。自分の実感を、つまり感受性をこめた言葉なら、誰のものでも真理探究に貢献できる。この「貢献できた」あるいは「真理に近づけた・理解が深まった」という感覚が、対話における承認である。ゆえに、自分が否定されたほうが、意見を変える必要があるので、歓迎すべきこととなる。

では、真理に関心がない「自分の気持ち至上主義者」はどうすればいいのが。要するに、他者を排除しなければいいのだ。そのためには、自分の気持ちこそ従うべき正しさであるという「至上主義者」ではなく、ただ自分の気持ちのみに関心があるという「至上主義者」になる必要があるだろう。つまり、たとえば否定されたら、「否定されたぞ、私はどう思っているだろう」というふうに、すべてを自分という対象への興味にするのだ。ゆえに他者を排除することはなく、承認も、他者に対する自分の反応をそれとして積み重ねていけばよい。

しかしそのような人は、真理に興味がある人にとっては、虚しさを感じさせる人、人間不信を招く人となるかもしれない。なぜなら、私は熱心に相手の話を聞き、言葉も交わすが、自分の世界から出ようとしないからである。私は、他者という刺激物に対し、自分がどのように反応するかのみに興味があるのであつて、他者そのものには興味がないのだ。それでも、「みんながそうすべき」という真理の存在を認められないなら、自分という対象

に興味を持つ「自分の気持ち至上主義者」になるしかないだろう。

参加して下さった方々、すみません。こんな結論になってしまいました。自分の気持ち至上主義者」も徹底すれば、満足に値する承認が得られるのではないか。ということです。自分も、相手にとっては刺激物という単なるモノ扱いかもしれないですが、自分への興味に比べたら瑣末なことに思えます。書き始めた当初は、自分の気持ち至上主義者の「正しさ・真理＝自分の気持ち」ではおかしくて、自分の中以外に真理を求めていこうという方向にしようと考えていました。けれど、やはり「だれもがそうすべきこと」があるとはどうしても思えず、このような形となりました。筋は通っている気がするのですが、いかがでしょうか。